



両親に見守られていることも知らず

# 熊大病院に 宮島さんを見舞って

詩 ◇◇◇◇◇ 古閑美子

過ぎるななごせの日々を  
怒りと悲しみが  
その体中をかきめぐって来た  
うしろさ  
「おめえとていつまでか  
ご退院すか」  
この言葉の聞ける日が果して  
この母と肩をたたくあつらひ  
生きているという日々のまま  
であれば  
その日々は  
あまりにもむづい  
これからの季節の厳しき  
指先のこぼれることも知らず  
ただ肉親の愛のまなざしに  
看守られての日々

過るななごせの日々を  
怒りと悲しみが  
その体中をかきめぐって来た  
うしろさ  
「おめえとていつまでか  
ご退院すか」  
この言葉の聞ける日が果して  
この母と肩をたたくあつらひ  
生きているという日々のまま  
であれば  
その日々は  
あまりにもむづい  
これからの季節の厳しき  
指先のこぼれることも知らず  
ただ肉親の愛のまなざしに  
看守られての日々

## 僕にとって三池は

### 日本の「赤い星」

守る会に入れてほしい

〔高校の先生から〕  
うれしいたより

これは、久原先生という高校の先生から、このごろ守る会事務局に寄せられてきた手紙です。はげまされることも多く、何はともあれ、大集会を迎えようとしているこの際、感謝をこめて紹介致します。

前略、ご免下さい。

高校の二年生の時、一九六〇年の三池三十三日の闘い。隣の県で闘われている「ホンモノ」の労働者による本格的な闘い。幼稚な僕の胸にも安原・全学連以上の重みをもって迫ってきました。

久保さんの名は、樺さん、浅沼さんと同様、当時の僕の背筋を走った戦慄とともに、思い出出すことができました。

京都での、決して明るくはない大学生活を送っている時、あの屈辱の「大爆発」。

「合理化とは、まさに人殺しである。それにしても、余りにひどいじゃないか……」

その朝事件を報じた新聞を前にして、僕は表現を絶するであらう現場の怒りと悲しみを想って、陰

# 三池大爆発 六周年集会

## 働く者の生命 働く者の平和を叫ぶ



日時 11月8日(土)  
PM6:00  
場所 神戸労働会館  
講演者 三池三十三日闘いの経験者  
神戸労働会

……眼前の人物に対して、殺意に  
近い敵意を抱かせられた最初の経  
験でした。  
「ケネディ暗殺を忘れることが  
あっても、決して三池だけは忘れ  
ないぞ」とノートに書きつけた  
時、僕はこれから自分が、そう  
いう生き方をすると、というき  
かせたのです。

でも僕が思ったことと言えば、  
その冬のアルバイト賃金をすべて  
カンパ資金として送る、という程  
度のものでもありませんでした。

「三池日記」(向坂逸郎著)に  
触れたのは、それよりずっと後の  
ことでした。小説・ルポ・専門書

朝日新聞の「標榜」みいけと  
アンボを切り抜いて、気になり  
ながらも今日まで、机の上に置き  
つ放した。「朝日ジャーナル」  
の十一月二日号を読んで、やっ  
と今日筆をとった次第です。

三池〇〇集を待たずに、入  
会させていただけるとしようか。  
上述の「朝日ジャーナル」の原  
論文に紹介されている以上のこと  
は、手続書、規約等何も知らない  
のですが……。

同封の二千円は一年分の会費と  
カンパのつもりです。三池に幸  
ふ会にしてみても、金員資格につ  
いては……。

## 「みいけ」を武器に 変革めざし前進

小学校の先生からも  
東京の小学教師の藤井保教先生からも、うれしき便りが寄せら  
れました。ありがとうございます。

日夜、言葉にいろいろあらわせない  
きびしい状況の中であって、権力  
者とわたりあつておられる三池  
組の同志に敬意を表します。

小生東京とはいえず、私は多摩の  
山々に囲まれた小さな小学校に  
とめて一教師です。

この山奥にも、七〇年安原が  
飛びこんできています。自民党お  
よび宗教団体による署名は、地域  
ボスを中心とていじわりとほりこ  
み、安原の「二丁」の字も知らな  
く、任民に賛成署名を、反動的につ  
きつけてきています。

そうした状況の中で、教室の中  
で、子ども同志の文通もさせ  
たいという希望もあります。おた  
が、子ども同志考案をおおひけ合  
って、意見を聞かせたいと思っ  
ています。

表現するより、御手配願えれば  
幸甚に存じます。

二千円は、機関紙代として同封  
します。おひきは活動費にまわし  
ていただきます。

## 闘う相手は一つだ

### 妻の姿に湧いた気力

#### 感動呼んだ一停年退職者の便り

拝啓、昭和十年十一月、船橋手  
として入社以来、苦しがったこと  
乗じたことのあるおぼろげな  
たが、私の生涯を大問として  
きな、また私自身を大問として  
みつめ直させたのが、三池闘争で  
した。

それまでの私は現在の社会体制  
傍者であるならば組合を信じ、仲

間を信じようと決意をいたした次  
第です。

しかし、生活の苦しさからとき  
どき意志が砕けそうなのがあり  
ましたが、互いに信じ合っている  
仲間や、私より以上に苦しみ耐  
えている妻を見る時「何クソッ」  
という気が湧いてきました。

この一層、チマキをしめ直して闘  
うて下さるよう、切にお願する  
次第です。

停年退職は、私の意志が好むと  
好まざるにかかわらず、五十五  
才の誕生日の前日をもって退職と  
いうことになりましたが、これは資  
本家が労働者の体力の限界や能力  
の限界を、資本の側から判断し、  
まして三池組によって培われ

た私の精神は、何時、どこでも傍  
者として生き抜く覚悟をこめて  
ますので、いままで通りのご支援  
ご指導をお願い申し上げます。

港務所港職三分会  
組合員皆様へ  
×

この手紙は、「私たちの分会で  
停年退職された磯崎さんという人  
から寄せられた私たちの精神に  
りたされているおぼろげな  
ひ、みいけ」にのせていたきた  
いと思ひます」と、港務三分会の  
平川道治さんから来た手紙です。

藤井先生の住所は「東京都西  
多摩郡奥多摩町原二七二」です。